

秋の瞳

八木重吉

青空文庫

序

私は、友が無くては、耐へられぬのです。しかし、私には、ありません。この貧しい詩を、これを、読んでくださる方の胸へ捧げます。そして、私を、あなたの友にしてください。

息を 殺せ

息を ころせ

いきを ころせ

あかんぼが 空を みる

ああ 空を みる

白い枝

白い 枝

ほそく 痛い 枝

わたしのこころに

白い えだ

哀しみの 火矢ひや

はつあきの よるを つらぬく

かなしみの 火矢こそするどく

わづかに 銀色にひらめいてつんざいてゆく

それにいくらのせようと あせつたとて

この わたしのおもたいこころだもの

ああ どうして

そんな うれしいことが
できるだらうか

朗^{ほが}らかな 日

いづくにか

ものの

落つる ごとし

音も なく

しきりにも おつらし

フェアリーの 国

夕ぐれ

夏のしげみを ゆくひとこそ

しづかなる しげみの

はるかなる奥に フェアリーの 国をかんずる

おほぞらの ところ

わたしよ わたしよ

白鳥となり

らんらんと 透きとほつて

おほぞらを かけり

おほぞらの うるわしいところに ながれよう

植木屋

あかるい 日だ

窓のそとをみよ たかいところで

植木屋が ひねもすはたらく

あつい 日だ

用もないのに

わたしのところで

朝から 刈りつづけてゐるのは いったいたれだ

ふるさとの 山

ふるさとの山のなかに うづくまつたとき

さやかにも 私の悔いは もえました

あまりにうつくしい それの ほのほに

しばし わたしは

こしかたの あやまちを 讃むるようなきもちになつた

しづかな 画家

だれでも みてゐるな、

わたしは ひとりぼちで描くのだ、

これは ひろい空 しづかな空、

わたしのハイ・ロマンスを この空へ 描いてやろう

うつくしいもの

わたしみづからのなかでもいい

わたしの外の せかいでも いい

どこにか 「ほんとうに 美しいもの」は ないのか

それが 敵であつても かまわない

及びがたくても よい

ただ 在るといふことが 分りさへすれば、

ああ ひさしくも これを追ふにつかれたところ

一群の ぶよ

いち群のぶよが 舞ふ 秋の落日

(ああ わたしも いけないんだ

他人も いけないんだ)

まやまやまやと ぶよが くるめく

(吐息ばかりして くらすわたしなら

死んぢまつたほうが いいのかしら)

鉛と ちようちよ

なまり
鉛のなかを

ちようちよが とんでゆく

花になりたい

えんぜるになりたい
花になりたい

無造作な 雲

無造作な くも、
あのかものあたりへ 死にたい

大和行

大和やまとの国の水は ころろのようにながれ

はるばると 紀伊とのさかひの山山のつらなり、

ああ 黄金きんのほそいとにひかつて

秋のころろが ふりそそぎます

さとうきびの一片をかじる

きたない子が 築地ついでちからひよつくりとびだすのもうつくしい、

このちさく赤い花も うれしく

しんみりと むねへしみてゆきます

けふはからりと 天気もいいんだし

わけもなく わたしは童話の世界をゆく、
 日は うららうららと わづかに白い雲が わき
 みかん畑には 少年の日の夢が ねむる

皇陵や、また みささぎのうへの しづかな雲や

追憶は はてしなく うつくしくうまれ、

志しき幾ぎの宮のみやの 舞まひ殿でんにゆかをならして そでをふる

白びやくえ衣えの 神みこ女によめは くちびるが 紅あかい

咲く心

うれしきは

こころ 咲きいづる日なり

秋、山にむかひて うれひあれば

わがこころ 花と咲くなり

つるぎは
劔を持つ者

つるぎを もつものが ゐる、

とつぜん、わたしは わたしのまわりに

そのものを するどく 感ずる

つるぎは しづかであり

つるぎを もつ人は しづかである

すべて ほのほのごとく しづかである

やるか!?

なんどき 斬りこんでくるかわからぬのだ

壺つぼのような日

壺のような日 こんな日

宇宙の ころろは

彫きざみたい!といふ 衝動にもだへたであらう

こんな 日

「かすかに ほそい声」の主は^{ぬし}

光を 暗を そして また

きざみぬしみづからに似た ところを

しづかに つよく きざんだにちがひあるまい、

けふは また なんといふ

壺のような 日なんだらう

つかれたる 心

あかき 霜月の葉を

窓よりみる日 旅を おもふ

かくのごときは　じつに心おごれるに似たれど
まことは

こころ　あまりにも　つかれたるゆえなり

かなしみ

このかなしみを
ひとつに　続すぶる　力ちからはないか

美しい　夢

やぶれたこの 窓から

ゆふぐれ 街なみいろづいた 木をみたよる

ひさしぶりに 美しい夢をみた

心よ

ほのかにも いろづいてゆく ところ

われながら あいらしいところよ

ながれ ゆくものよ

さあ それならば ゆくがいい

「役立たぬもの」にあくがれて はてしなく

まぼろしを 追ふて かぎりなく
こころときめいて かけりゆけよ

死と珠^{たま}

死 と 珠 と

また おもふべき 今日が きた

ひびく たましい

ことさら

かつぜんとして 秋がゆふぐれをひろげるころ
たましいは 街を ひたはしりにはしりぬいて
西へ 西へと うちひびいてゆく

空を 指す さ
梢 こずゑ

そらを 指す

木は かなし

そが ほそき

こずゑの 傷 いたさ

赤ん坊が わらふ

赤んぼが わらふ

あかんぼが わらふ

わたしだつて わらふ

あかんぼが わらふ

花と咲け

鳴く 蟲よ、花と咲け

地におつる

この 秋陽あきび、花 と 咲 け、

ああ さやかにも

この ころ、咲 けよ 花と 咲 けよ

甕かめ

甕 を いくつしみたい

この日 ああ

甕よ、こころのしづけさにうかぶ その甕

なんにもない

おまへの うつろよ

甕よ、わたしの むねは

『甕よ!』と おまへを よびながら

あやしくも ふるへる

心よ

こころよ

では いつておいで

しかし

また もどつておいでね

やつぱり

ここが いいのだに

こころよ

では 行つておいで

たま
玉

わたしは

玉に ならうかしら

わたしには

何なんにも 玉にすることはできまいゆえ

こころの 海うなづら

照らされし こころの 海うなづら

しづみゆくは なにの 夕陽

しらみゆく ああ その 帆かげ

日は うすれゆけど

明けてゆく 白き ふなうた

貫ぬく^{つら} 光

はじめに ひかりがありました

ひかりは 衰しかつたのです

ひかりは

ありと あらゆるものを

つらぬいて　ながれました

あらゆるものに　息をいき　あたへました

にんげんのこころも

ひかりのなかに　うまれました

いつまでも　いつまでも

かなしかれと　祝福いわわれながら

秋の　かなしみ

わがこころ

そこの　そこより

わらひたき

あきの かなしみ

あきくれば

かなしみの

みなも おかしく

かくも なやまし

みもと めと

はなと ぐち

いちめに

くすぐる あきのかなしみ

なみだ
涙

なみだなみだ
涙、涙

ちららしい

なみだの 出あひがしらに

もの 寂びた

わらひ
哄が

ふつと なみだを さらつていつたぞ

石くれ

石くれを ひろつて

と視、こう視

哭^なくばかり

ひとつの いしくれを みつめてありし

ややありて

こころ 躍^{おど}れり

されど

やがて　こころ　おどらずなれり

竜舌蘭

りゆうぜつらん　の

あをじろき　はだえに　湧く

きわまりも　あらぬ

みづ色の　寂びの　ひびき

かなしみの　ほのほのごとく

さぶしさのほのほの　ごとく

りゆうぜつらんの しづけさは
豁かつぜん然ぜんたる 大空を 仰あふぎたちたり

矜持ある 風景

矜持ある 風景

いつしらず

わが ところに 住む

浪ろう、浪、浪 として しづかなり

静寂は怒る

静寂は怒る、
みよ、蒼穹のいきどほ怒りを

悩ましき 外景

すとうぶを みつめてあれば
すとうぶをたたき切つてみたくなる

ぐわらぐわらとたぎる

この すとうぶの 怪！ 寂！

ほそい
がらす

ほそい
がらすが
ぴいんと
われました

葉

葉よ、

しんしん と

冬日がむしばんでゆく、

おまへも

葉と 現^まざるまでは

いらいらと さぶしかつたらうな

葉よ、

葉と 現^まじたる

この日 おまへの 崇^{たか}巖

でも、葉よ

いままでは さぶしかつたらうな

彫られた 空

彫られた 空の しづけさ

無辺際の ちからづよい その木地に

ひたり！ と あてられたる

さやかにも 一刀の跡

しづけさ

ある日

もえさかる　ほのほに　みいでし
きわまりも　あらぬ　しづけさ

ある日

憎しみ　もだえ

なげきと　かなしみの　おもわにみいでし
水の　それのごとき　静けさ

夾竹桃

おほぞらのもとに　死ぬる

はつ夏の　　こころ　　ああ　　ただひとり
きようちくとうの　　くれなるが
はつなつのこころに　　しみてゆく

おもひで

おもひでは　　琥珀オパールの

ましづかに　　きれいなゆめ

さんらんとふる　　嗟嘆さたんでさへ

金色きんの　　葉の　　おごそかに

ああ、こころ　　うれしい　　煉獄の　　かげ

人の子は たゆたひながら

うらぶれながら

もだゆる日 もだゆるについで

きわまりしらぬ ケーオスのしじまへ

廓寥と 彫られて 燃え

焰々と たちのぼる したしい風景

哀しみの海

哀しみの

うなばら かけり

わが玉 われは

うみに なげたり

浪よ

わが玉 かへさじとや

雲

くものある日

くもは かなしい
くもの ない日
そらは さびしい

在る日の ところ

ある日の ところ
山となり

ある日の ところ
空となり

ある日の　こころ
わたしと　なりて　さぶし

幼い日

おさない日は
水が　もの云ふ日

木が　そだてば
そだつひびきが　きこゆる日

痴寂な手

痴寂^{ちせき}な手 その手だ、

こころを むしばみ 眸^めを むしばみ

山を むしばみ 木と草を むしばむ

痴寂な手 石くれを むしばみ

飯を むしばみ かつをぶしを むしばみ

ああ、ねずみの 糞^{ふん}さへ むしばんでゆく

わたしを、小さい^ち 妻を

しづかなる空を 白い雲を

痴寂な手 おまへは むさぼり むしばむ

おお、おろかしい 寂寥の手

おまへは、まあ

じぶんの手をさへ 喰つて しまふのかえ

くちばしの黄な 黒い鳥

くちばしの 黄いろい

まつ黒い 鳥であつたつけ

ねちねち うすら白い どぶのうへに
 籠かごのなかで ぎやうつ！ とないてゐたつけ、

なにかしら ほそいほそいものが
 ピンと すすりな哭いてゐるような
 そんな 真昼で あつたつけ

何故に 色があるのか

なぜに 色があるのだらうか
 むかし、混沌は さぶし かつた

虚無は 飢えてきたのだ

ある日、虚無の胸のかげの いちまつ 一抹が

すうつと アムプロウジアル 蠱 惑 の 翡翠に ねあせ ながれた

やがて、ねぐるしい ブルウ ある夜の 盗汗が

四月の雨にあらわれて ブルウ 青に ねあせ ながれた

白き響

さく、と 食へば

さく、と くわるる この 林檎の 白き肉

なにゆえの このあわただしさぞ

そそくさとくひければ

わが 鼻先きに ぬれし汁つゆ

ああ、りんごの 白きにくにただよふ

まさびしく 白きひびき

丘を よぢる

丘を よぢ 丘に たてば

こころ わづかに なぐさむに似る

さりながら

丘にたちて ただひとり

水をうらやみ 空をうらやみ

たいぼく
大木を うらやみて おりてきたれる

おもたい かなしみ

おもたい かなしみが さえわたるとき

さやかにも かなしみは ちから

みよ、かなしみの つらぬくちから

かなしみは よろこびを

怒り、なげきをも つらぬいて もえさかる

かなしみこそ

すみわたりたる すだまとも 生くるか

胡蝶

へんぽんと ひるがへり かけり

胡蝶は そらに まひのぼる

ゆくてさだめし ゆえならず

ゆくて かがやく ゆえならず

ただひたすらに かけりゆく

ああ ましろき 胡蝶

みずや みずや ああ かけりゆく

ゆくてもしらず とももあらず

ひとすぢに ひとすぢに

あくがれの ほそくふるふ 銀糸をあへぐ

おほぞらの 水

おほぞらを 水 ながれたり

みづのこころに うかびしは

かちもなき 銀の 小舟、おふね ああ

ながれゆく みづの さやけさ

うかびたる ふねのしづけさ

そらの はるけさ

こころ

そらの はるけさを かけりゆけば

豁然と ものありて 湧くにも 似たり

ああ ころころは かきわけのぼる

しづけき くりすたらいの 高原

霧が ふる

霧が ふる

きりが ふる

あさが しづもる

きりがふる

空が 凝視^みてる

空が 凝視^みてゐる

ああ おほぞらが わたしを みつめてゐる
おそろしく むねおどるかなしい 瞳

ひとみ！ ひとみ！

ひろやかな ひとみ、ふかぶかと

かぎりない ひとみのうなばら

ああ、その つよさ

まさびしさ さやけさ

こゝろ 暗き日

やまぶきの花

つばきのはな

こころくらきけふ しきりにみたし

やまぶきのはな

つばきのはな

蒼白い きりぎし

蒼白い きりぎしをゆく

その きりぎしの あやうさは

ひとの子の あやうさに似る、

まぼろしは はやて 暴風めく

黄に 病みて むしばまれゆく 薫香

悩ましい まあぶるの しづけさ

たひらかな そのしづけさの おもわに

あまりにもつよく うつりてなげく

悔恨の 白い おもひで

みよ、悔いを むしばむ

その 悔いのおぞましき

聖栄のひろやかさよ

おお 人の子よ

おまへは それを はぢらうのか

夜の薔薇そうび

ああ

はるか

よるの

薔薇

わが児こ

わが児と

すなを もり

砂を くづし

浜に あそぶ

つかれたれど

かなし けれど

うれひなき はつあきのひるさがり

つばねの 穂

ふるへるのか

そんなに 白つぽく、さ

これは

つばねの ほうけた 穂

ほうけた 穂なのかい

わたしぢや なかつたのか、え

人を 殺さば

ぐさり！ と

やつて みたし

人を ころさば

こころよからん

水に 嘆く

みづに なげく ゆふべ

なみも

すすり 哭く、あわれ そが

ながき 髪

砂に まつわる

わが ひくく うたへば

しづむ 陽

いたいたしく ながる

手 ふれなば

血 ながれん

きみ むねを やむ

きみが 唇くち

いとど 哀しからん

きみが まみ

うちふるわん

みなど、ふえ とほ鳴れば

かなしき 港

茅渟ちぬの みづ

とも なりて、あれ

とぶは なぞ、

魚か、さあれ

しづけき うみ

わが もだせば

みづ 満々と みちく

あまりに

さぶし

蝕む 祈り

うちけぶる

おもひでの 瓔珞

悔いか なげきか うれひか

おお、きららしい

かなしみの すだま

びらる びらる

ゆうらめく むねの 妖玉

さなり さなり

死も なぐさまぬ

らんらんと むしばむ いのり

哀しみの 秋

わが 哀しみの 秋に似たるは
みにくき まなこ病む 四十女の
べつとりと いやにながい あご

昨夜みた夢、このじぶん

『腹切れ』と

刀つきつけし 西郷隆盛の顔

猫の奴めが よるのまに

わが 庭すみに へどしてゆきし

白魚しらうをの なまぬるき 銀のひかり

静かな 焰

各ひとつの 木に

各ひとつの 影

木は

しづかな ほのほ

石塊いしくれと 語る

石くれと かたる

わがこころ

かなしむべかり

むなしきと かたる、

かくて 厭くなき

わが こころ

しづかに いかる

大たい木ぼく を たたく

ふがいなさに　ふがいなさに

大木をたたくのだ、

なんにも　わかりやしない　ああ

このわたしの　いやに安物のぎやまんみたいな

『真理よ　出てこいよ』

出てきてくれよ』

わたしは　木を　たたくのだ

わたしは　さびしいなあ

稲妻

くらい よる、

ひとりで 稲妻をみた

そして いそいで ペンをとつた

わたしのうちにも

いなづまに似た ひらめきがあるとおもつたので、

しかし だめでした

わたしは たまらなく

歯をくひしばつて つつぷしてしまつた

しのだけ

このしだけ

ほそくのびた

なぜ ほそい

ほそいから わたしのむねが 痛い

むなしさの 空

むなしさの ふかいそらへ

ほがらかに生まれ 湧く ポエジイ 詩のこころ

旋律は 水のように ながれ

あらゆるものがそこにをわる ああ しづけさ

こころの 船出

しづか しづか 真珠の空

ああ ましろき こころのたび

うなそこをひとりゆけば

こころのいろは かぎりなく

ただ こころのいろにながれたり

ああしろうく ただしろうく

はてしなく ふなでをす

わが身を おほふ 真珠の そら

朝の あやうさ

すずめが とぶ

いちじるしい あやうさ

はれわたりたる

この あさの あやうさ

あめの 日

しろい きのこ
きいろい きのこ

あめの日

しづかな日

追憶

山のうへには

はたけが あつたつけ

はたけのすみに うづくまつてみた
あの 空の 近かつたこと
おそろしかつたこと

草の 実

実^み！

ひとつぶの あさがほの 実
さぶしいだらうな、実よ

あ おまへは わたしぢやなかつたのかえ

暗光

ちさい 童女が

ぬかるみばたで くびをまわす

灰色の

午後の 暗光

止まつた ウオツチ

止まつた

ウオツチ
懐中時計、

ほそい 三つの 針、

白い 夜だのに

丸いかほの おまへの うつろ、

うごけ うごけ

うごかぬ おまへがこわい

鳩が飛ぶ

あき空を はとが とぶ、

それでよい

それで いいのだ

草に
すわる

わたしの まちがひだつた
わたしのまちがひだつた
こうして 草にすわれば それがわかる

夜の
空の
くらげ

くらげ くらげ
くものかかつた 思ひきつた よるの月

虹

この虹をみる わたしと ちさい妻、

やすやすと この虹を讃めうる

わたしら二人 けふのさひわひのおほいさ

秋

秋が くると いふのか

なにもものとも しれぬけれど

すこしづつ　そして　わづかにいろづいてゆく、
わたしのこころが
それよりも　もつとひろいものなかへくづれて　ゆくのか

黎明

れいめいは　さんざめいて　ながれてゆく
やなぎのえだが　さらりさらりと　なびくとき
あれほどおもたい　わたしの　こころでさへ
なんとはなしに　さらさらとながされてゆく

不思議をおもふ

たちまち この雑草の庭に ニンフが舞ひ

エンゼルの羽音が きわめてしづかにながれたとて

七宝荘嚴の天の蓮華が 咲きいでたとて

わたしのところは おどろかない、

倦み つかれ さまよへる ところ

あへぎ もとめ もだへるところ

ふしぎであらうとも うつくしく咲きいづるなら

ひたすらに わたしも 舞ひたい

あをい 水のかげ

たかい丘にのぼれば

内海ないかいの水のかげが あをい

わたしのこころは はてしなく くづをれ

かなしくて かなしくて たえられない

人間

巨人が 生まれたならば

人間を みいんな 植物にしてしまうにちがいない

皎々とのぼつてゆきたい

それが ことによくすみわたつた日であるならば
そして君のところが あまりにもつよく

説きがたく 消しがたく かなしさにうづく日なら
君は この阪路さかみちをいつまでものぼりつめて

あの丘よりも もつともつとたかく

皎々と のぼつてゆきたいとは おもわないか

キーツに 寄す

うつくしい 秋のゆふぐれ
 恋人の 白い プロファイナル 横顔 — キーツの まぼろし 幻

はらへたまつてゆく かなしみ

かなしみは しづかに たまつてくる

しみじみと そして なみなみと

たまりたまつてくる わたしの かなしみは

ひそかに だが つよく 透きとほつて ゆく

こうして わたしは 痴人のごとく

さいげんもなく かなしみを たべてゐる

いづくへとても ゆくところもないゆえ

のこりなく かなしみは はらへたまつてゆく

怒れる いかに
相 すがた

空が 怒つてゐる

木が 怒つてゐる

みよ！ ほほえみ 微笑が いかつてゐるではないか

寂寥、憂愁、哄笑、愛慾、

ひとつとして 怒つてをらぬものがあるか

ああ 風景よ、いかれる すがたよ、

なにを そんなに待ちくたびれてゐるのか

大地から生まれいづる者を待つのか

雲に乗つてくる人を ぎよう望して止まないのか

かすかな イメエジ
像

山へゆけない日 よく晴れた日

むねに わく

かすかな イメエジ
像

秋の日の
こころ

花が 咲いた

秋の日の

こころのなかに 花がさいた

白い 雲

秋の いちじるしさは

空の 碧を みどり つんぎいて 横にながれた白い雲だ
なにを かたつてゐるのか
それはわからないが、

りんりんと かなしい しづかな雲だ

白い路

白い 路

まつすぐな 杉

わたしが のぼる、

いつまでも のぼりたいなあ

感傷

赤い 松の幹は 感傷

沼と風

おもたい

沼ですよ

しづかな

かぜですよ

毛蟲を うづめる

まひる

けむし を 土にうづめる

春も 晩く

春も おそく

どこともないが

大空に 水が わくのか

水が　ながれるのか

なんととはなく

まともにはみられぬ　こころだ

大空に　わくのは

おもたい水なのか

おもひ

かへるべきである　ともおもわれる

秋の
壁

白き

秋の 壁に

かれ枝もて

えがけば

かれ枝より

しづかなる

ひびき ながるるなり

郷愁

このひごろ

あまりには

ひとを 憎まず

すきとほりゆく

郷愁

ひえびえと ながる

ひとつの ながれ

ひとつの

ながれ

あるごとし、

いづくにか 空にかかりてか

る、ると

ながるらしき

宇宙の 良心

宇宙の良心―耶蘇

空と光

彫きざまれたる

空よ

光よ

おもひなき　哀あはしさ

はるの日の

わづかに　わづかに霧きれるよくはれし野をあゆむ

ああ おもひなき
かなしきよ

ゆくはるの 宵

このよひは ゆくはるのよひ

かなしげな はるのめがみは

くさぶえを やさしき唇^{くち}へ

しつかと おさへ うなだれてゐる

しづかなる
ながれ

せつに せつに

ねがへども けふ水を みえねば

なぐさまぬ こころおどりて

はるのそらに

しづかなる ながれを かんずる

ちいさい ふくろ

これは ちいさい ふくろ

ねんねこ おんぶのとき

せなかに たらす 赤いふくろ

まつしろな 絹のひもがついてゐます

けさは

しなやかな 秋

ごらんなさい

机のうへに 金糸のぬいとりもはいつた 赤いふくろがおいてあ
る

哭くな 児よ

なくな 児よ

哭くな 児よ

この ちちをみよ

なきもせぬ

わらひも せぬ わ

怒り

かの日の 怒り

ひとりの いきもののごとくあゆみきたる

ひかりある

くろき 珠のごとく うしろよりせまつてくる

春

春は かるく たたずむ

さくらの みだれさく しづけさの あたりに

十四の少女の

ちさい おくれ毛の あたりに

秋よりは ひくい はなやかな そら

ああ けふにして 春のかなしさを あざやかにみる

柳も かるく

やなぎも かるく

春も かるく

赤い 山車^{だし}には 赤い児がついて

青い 山車には 青い児がついて

柳もかるく

はるもかるく

けふの まつりは 花のようだ

青空文庫情報

底本：「八木重吉全詩集1」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年8月30日第1刷発行

1997（平成9）年6月25日第4刷発行

底本の親本：「八木重吉全集」筑摩書房

1982（昭和57）年9月

入力：j.utiyama

校正：富田倫生

1998年5月1日公開

2012年10月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋の瞳

八木重吉

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>